

## 満州引揚げ者の手記

長谷川 修

第二次大戦後の満州からの引揚げについてはあまりにも悲惨で、在留邦人一五〇万のうち二五万人が死亡とされているものの、きちんとした数字はない。中国残留孤児は私より若干年長者の話であり、聞かたびに心が痛む。

藤原ていの『流れる星は生きている』は往年の超ベストセラーであり気にかかっていたが、先日、本屋の文庫本の棚で初めて見つけ、一晩で読んだ。

長春の観象台の課長夫人が、子供三人（男の子は六歳と三歳、長女は生後一ヶ月）を連れて、二〇年八月九日から翌年九月の博多上陸までの、満州引揚げの記録である。

著者たち観象台団は、満州と北朝鮮との国境の南側の宣川に一〇ヶ月ほど留められた。若い男性のいない団では、子供の虐待死や気が狂う人も出る。極限状況では皆がエゴ丸出しとなり、善人だけでは生きていけない。著者もおむつの洗濯用の水の手当や子供の伝染病に苦労し、時にはゴミを漁ったり、友を裏切ることもあった。辛い生活の中、団員で歌い励まされたのは、日本軍兵士が前線で作った「流れる星は生きている」の歌だ。

本当の苦労が始まるのは、八月初め宣川を発ち平壤から三八度線を越えるまでの一日間だ。道端には日本人の死体が多く転がっており、途中には険しい山や急流の川もある所を、子供三人とほとんど不眠不休で歩く。周りからは、「子供三人は無理だよ。二人を助けるために一人置いていったら」と声をかけられることもあった。我が子を元気づけるために蹴飛ばしたり、つい男言葉で叱ったりと、文字通り死線を彷徨いながら三八度線を渡り米軍救援所に辿りつく。この後釜山を出港し、博多港の沖に二週間ほど留められてから帰還する。

著者は帰国後大病に罹り、療養中子供達に遺書として書いたのが本書の元となった。

三ヶ月遅れで帰国した夫は、夫人の作家生活に刺激を受け、後に小説家に転ずる。

作家新田次郎の誕生秘話だ。また、当時三歳の次男正彦は、現在数学者・エッセイストとして活躍中だ。